

古代日本語ラル構文のネットワーク*

名古屋大学 志波 彩子

キーワード：視点，テキスト，自然発生，自動詞，受身，可能，自発，尊敬

1. はじめに

1.1 目的

本研究は，古代日本語の/-(r)are-/（以下「ラル」と表記）述語文が持つ多義性を，自然発生的自動詞とテキストとの相互作用によって確立した構文と見なし，構文ネットワークとして捉えることの可能性について提唱する。

1.2 本研究が考える構文

構文（construction）とは，部分によって組み立てられた全体が繰り返される使用によって抽象的なパターンとして定着したもので，それ自体が意味と形式の統合体として心理的に実在する。ただし，構文は要素間の関係の秩序ないし組織であり，その独立性は相対的であって，要素と切り離されたところには存在しない（奥田 1980-81）。例えば，構文に「多義」を認めるのではなく，文（や語やテキスト）の最終的な意味は，構文の意味と要素の意味との相互作用によって生まれると考える（Croft 2003 も参照）。

2. 古代日本語のラル文の多義

- ① 受影受身「人にもてかしづかれて」（源氏・帚木）
- ② 自発「心ざしのほど浅からずおしはかられて，扇もうち置かれぬ」（枕・いみじう暑き昼中に）
- ③ 実現系可能「恋しからむことの堪へがたく湯水飲まれず」（竹取）
- ④ 状態受身（尾上 2003 の発生状況描写）「髪の美しげにそがれたる末も」（源氏・若紫）
- ⑤ 尊敬「人々近うさぶらはれよかし」（源氏・若紫）
- ⑥ 主催（吉田 2019）「仁王会など行はる」（源氏・明石）

2.1 受身の特徴

古代語には，「誰がやったか」ではなく「何が起こったか」について述べる事態実現受身（「城が建てられた」等）が存在しなかったとされる。受身には，有情主語の受身，上の状態受身，潜在的受影者のいる非情主語受身（「右大臣の御勢は...おされたまへり」等），擬人化の非情主語受身があったとされる（岡部 2018，川村 2012）。古代語の受身の中心的タイプは有情主語の受身であり，「影響を身に受ける（受影）」という意味を表していた（川村 2012 等）。

* 本稿執筆にあたり，ワークショップのメンバーである尾谷昌則氏，井本亮氏，貝森有祐氏から多くのコメントとご教示を頂いた。また，同僚の秋田喜美氏，大島デイヴィッド義和氏，宮地朝子氏らに議論にお付き合いいただき，構想をまとめることができた。國學院大学の吉田永弘氏には，筆者の執拗な質問に丁寧にお答えいただき，古代語における主催用法の理解を深めることができた。ここに深く感謝の意を表したい。ただし，本稿における誤解や無理解はすべて筆者の責任によるものである。

2.2 自発と可能—実現構文

古代語の可能構文は否定に偏り、肯定の可能は自発との境界が極めて曖昧である¹（可能はアクチュアルな実現系可能のみ存在する）。自発と可能は共に「**動作主の側から事態を述べる**」という点及び「**事態が実現するか否か**」に注目している点で共通している（志波 2018）。本稿ではこれを「実現構文」として一つにまとめて検討する。

- (1) ...何にかは、聞かせむと思へば、うち背かれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、あはれとも、うちひとりごたるに、何ごとぞなど、あはつかにさし仰ぎみたらむは、いかがは口惜しからぬ。（源氏・帚木）〔聞かせてみたところで何になろうと思うと、ついそっぽを向きたくなつて、自分一人の思い出し笑いを浮かべて、『ああ』などと、独り言も漏れてきますと、...〕

2.3 尊敬と主催

- 1) ラルの尊敬用法は、上代には用例がなく（つまり後発とされる）、変体漢文の資料に多く、和文資料では男性の会話に多いとされている（森野 1971）。
- 2) 特定の個人の動作主に対する敬意を表す「尊敬」と、動作主が漠然としている「主催」の用法が議論されてきた（吉田 2019, 桜井 1966 の公尊敬, 尾上 2003 の非人称主催）。通常の「尊敬」は、他の尊敬表現に比べて身分の高くない人に用いられる、とされる。
- 3) 穂田 (2008) は、変体漢文である古記録（藤原氏の日記）における尊敬の「被」が、「給」に比べて「公的行為の表現に用いられる傾向が著し」（p.15）く、また「その行為の主催者ないしは主権者の認識はなされていても、特定の動作主の認識は必ずしも必要とはされていない」（p.232）とする。つまり、主催構文が多いことを指摘している。
- 4) 以下の主催構文は、動作主が漠然として背景化され、出来事が実現する（した）ことを前面に出して述べている点で事態実現受身と機能が酷似しているが、対象が主格表示された例が確認されないことから一般には尊敬用法とされてきた。

- (2) これより前の歌を集めてなむ、万葉集と名付けられたりける。（古今 仮名序）
- (3) 唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひておろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の樂せらる。（源氏・胡蝶）〔源氏の大臣は、かねて唐風の船をお造らせになっていたのを、急いで装いをおつけさせになって、はじめて池にお浮かべになるが、その日は、雅楽寮の楽人をお召しになって、船樂を催される〕

3. 自然発生的自動詞構文との関係

ラルはラ行下二段の自然発生的自動詞²の語尾の類推（再分析）から文法的接辞として取り出されたとされる（釘貫 1991 ほか）。自然発生とは、動作主の働きかけなしに**変化が実現する**という意味である。文法的接辞として取り出されたラルは、語彙的自動詞構文から自然発生の意味を継承しているが、次のような相違点がある。

- 1) 人（動作主）がいなければ起こり得ない事態を表す動詞に用いられる⇒【動作主含意】

¹ しかし動作主の事態実現の期待の有無で対立している（吉田 2013）。

² 「荒る、枯る、切る、暮る、痴る、馴る、濡る、腫る、晴る、惚る、群る、漏る、割る、折る」等。

- 2) 「状態受身」と「主催」以外は、有情者の側から自分に対して行為が自然発生することを述べている⇒【有情者視点◎】

語彙的自動詞は人間の動作主の存在を前提としないのに対し、ラルは本来動作主が行う事態をも「自然発生」的に捉える構文として成立したと考えられる。本研究は、ラル構文の各意味の表れ方を以下のように考えてきた。

さて、ラル構文は、「有情者（自分）に対して行為が自然発生する」という述べ方で述べるための構文であった。このとき、有情者に対して自分に意志がない（当該行為を積極的に選択していない）のに、何らかの要因によって自分の行為が自然発生するのが自発である。そして、有情者に行為実現の期待はあるが意志はないのに何らかの要因によって自然発生するのが肯定可能（実現）である（吉田 2013）。また、有情者が実現を期待して行えば通常実現する行為が、何らかの要因によって自然発生しないのが不可能（不実現）であると考えられる。さらに、有情者に対して自分の意志と関係なく他者によって行為が自然発生するのが受身（受影受身）なのだろう（志波 2018: 181）。

つまり、視点の置かれた有情者が行為の動作主なら実現構文（自発・可能）の解釈になり、動作主が他にいて、視点のある有情者が対象ないし影響を受ける人であるなら受身の解釈になる。そして、古代日本語に事態実現受身がなかったのは、他言語が事態実現受身を発達させた領域に実現構文（自発・可能）を中心的に発達させたからであるとした（志波 2018）。

- (4) 「【前略、女性の、漢字の多い消息は】心地にはさしも思はざらめど、おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつつ、ことさらびたり。【後略】」（源氏・帚木、川村 2012b:170）
〔本人としてはさほどにも思っていないのかもしれませんが、こちらではしぜんにごつごつした声で読み読みされることになって、わざとらしい感じになります。〕
- (5) 人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし、めづらしとこそおぼゆれ。絵など、あまたたび見れば、目も立たずかし。近う立てたる屏風の絵などは、いとめでたけれども、見も入れられず。枕草子・人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は）〔人の顔で格別にすばらしいと見える所は、何度見ても、ああいいな、めったにないことだと感じられる。絵などは、何度も何度も見てしまうと、目も引かれなくなるものだ。身近に立っている屏風の絵などは、たいへんすばらしいけれど、注意をこらして見る気にもならない。〕

本が読まる ⇒ { (自分が意図してないのに勝手に) 本が読まれた【自発】
(心がざわついていつもなら実現するのに) 本が読まれない【可能】
(自分が隠していた大事な) 本が読まれた【受影】
cf. (人々によって) 本が読まれた【事態実現受身】

そして、本研究は、ラル構文が「有情者の側から述べる」構文を中心に発達させたのは、これが用いられたテキストの視点構造と深く関係していると考ええる。以下この点について説明する。

4. テキストの「視点」

➤ 例えば Genette, G. (1972) 『物語のディスクール』

焦点化ゼロ（神の視点、あらゆる登場物の内面を把握できる）、②内的焦点化（登場人物視

点), ③外的焦点化 (外部の証人視点, いずれの登場人物の内面も直接には把握できない) 内的焦点化はさらに, 固定焦点化, 不定焦点化, 多元焦点化に分かれる

4.1 『源氏物語』: 不定焦点 (主に心理描写によって物語が進む)

代表的な和文物語である『源氏物語』は, 不定焦点 (視点内在的) で視点 (主題) を変えながら登場人物の心理描写が続いていく。感情形容詞・心理動詞による心理描写や思考内容がそのまま地の文に表れるテキストでは, 話し手 (読み手) が主題となっている登場人物に寄り添って感情移入し, 共感しながら物語が展開していく。こうしたテキストの特性が有情者の側から捉えるというラル構文の特性に貢献している (波下線は心理描写)。

- (6) あはれなる御返りを見たまふにも, 尽きせぬことどものみなむ。いとつれづれにながめがちなれど, 何となき御歩きもものうく思しなられて思しも立たれず。(源氏・葵, 新全 21: 69)

[無量の思いのこめられたお返事をごらんになるにつけても, どこまでも尽きせぬ悲しみをそそられるばかりである。源氏の君は, まことに所在なく, ともしれば物思いに虚けていらっしゃるが, さしたることもないお忍び歩きも気が重くおなりになって, お出かけになろうともなさらない。]

- (7) 若き者にて見馴れし世を思ひ出づるに, 隔て来にける年月数へられて, いとあはれなり。(源氏・玉鬘) [右近は, 若いころの姿をいつも見ていた昔のことをおもいだすと, これまでの積もる年月を数えずにはいられなくて, とても感慨深い思いである]

4.2 『今昔物語集』: ゼロ焦点／中立視点

桜井 (1966) が「公尊敬」という特殊なラル文の存在を指摘したのが, 和漢混交の文体的特徴を持つ『今昔物語集』(説話) であることが興味深い。その後吉田 (2019) により「主催」と呼ばれたラル構文は, 次のようなテキストに現れる。登場人物の内面描写に踏み込まず³, 起きた出来事を淡々と並べて語るテキストである ((2)(3)も参照)。

- (8) 彼の会, 其の山階寺にして行ふ。承和元年と云ふ年より始めて, 永く山階寺に置く。年ごとの公事として, 藤原の氏の弁官を以て勅使として, 今に下^{くだしつかは}遣して行る。亦, 諸寺諸宗の学者を撰て此の会の講師として, 年ごとに其の賞を以て僧綱^{そうごう}に任ぜる事, 此定れる例とす。(今昔・巻第十二第三)
- (9) 此より後, 天下早飈の時には, 此の大師の流を受て, 此の法を伝へる人を以て, 神泉にして此の法を行る也。而るに, 必ず雨降る。其の時に, 阿闍梨に勸賞を給る事, 定れる例也。今に絶ずとなむ語伝へたとや。(今昔・巻第十四第四十一)

4.3 テキストと構文

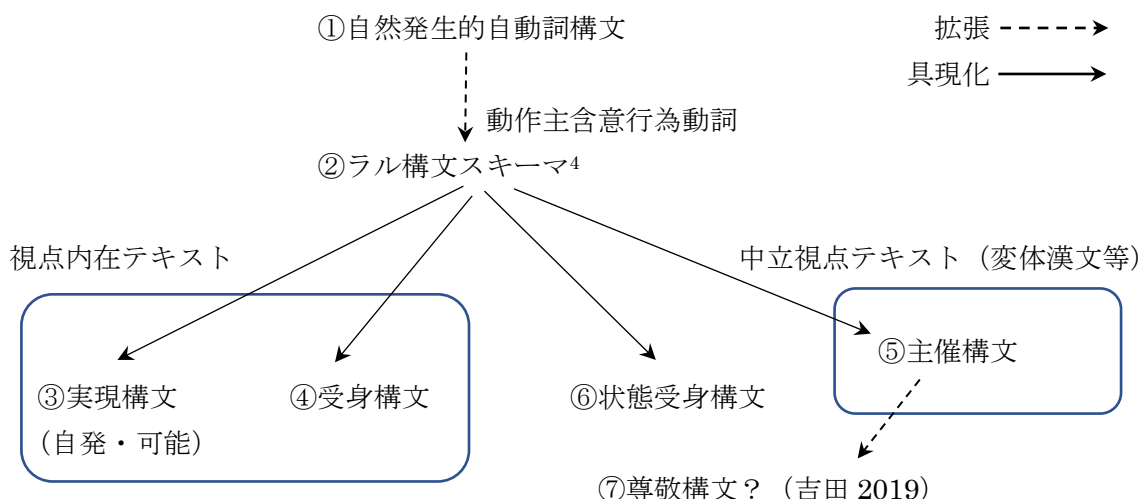
ラル構文は「動作主含意行為 (動詞) + 自然発生 (ラル)」という意味に, テキストの視点構造の影響で, 有情者視点から「有情者 (自分) に対して」という意味と形式 (有情者主題) を与えられ (問題①), 実現や受身といった構文として確立していったと考えられる。一方, 登場人物の内面に踏み込まずに起きた出来事を淡々と並べていく中立的視点のテキストでは, 動作主

³ 田中 (1998) は今昔の情意述語文を調査し, 源氏物語では「悲し vs. 悲しぶ」では圧倒的に形容詞「悲し」の使用に偏るのに対し, 今昔では「悲し」と「悲しぶ」が源氏における「悲し」の領域を分け合うように分布していることを示し, 和漢混交の文体特徴を情意述語文の側面から明らかにしている。

がいなければ起こり得ない事態を、動作主を背景化して出来事の生起（変化の実現）を中心に述べる構文、すなわち主催構文が成立し得たのだと考えられる。

5. ラル構文のネットワーク（問題②，問題③）

- ① 自然発生的自動詞構文：形式 [非情 N・φ/ガ/ノ 語彙的自然発生 IVre-]
意味「自然発生する（変化が自ずから実現する）」
- ② ラル構文のスキーマ：形式[有情者[◎] (非情 N・φ/ノ/ヲ) 動作主含意行為 V-(r)are-]
意味「有情者（自分）に対して行為が自然発生する」《有情者視点[◎]》
- ③ 実現^{動作主} [有情者^主 (原因句) (非情 N・φ/ノ/ガ/ヲ) 動作主含意行為 V-(r)are-]
- ④ 受身^{対象/受影者} [有情者^{φ/ノ/ガ} (有情者-ニ) (非情 N・φ/ノ/ガ/ヲ) 動作主含意行為 V-(r)are-]
- ⑤ 主催^{主催者} [有情者^{対象} 非情 N・φ/ヲ 動作主含意行為 V-(r)are-]
「(何らかの主催者によって) 事態が実現する」
- ⑥ 状態受身^{対象} [非情 N・φ/ガ/ノ 動作主含意行為 V-(r)are-taru]
「(何らかの動作主による) 行為の結果が状態として存在する」
- ⑦ 尊敬^{動作主/尊敬者} [有情者^{φ/ノ/ガ} (非情 N・φ/ヲ) 動作主含意行為 V-(r)are-]



テキストもまた、センテンス構文を要素とする意味と形式の統合体（construction）として、抽象的なパターンが存在すると考える。和文資料の中にも、場面描写、心理描写、心情吐露、出

⁴ より正確には、ラル構文の形式と意味を継承しながら、ラ行下二段の自動詞構文の影響を受けつつ成立したと考えられる。

来事描写などいくつかのテキストタイプが存在するだろう。そして、それぞれのテキストにふさわしい構文が要素として選ばれていると考えられる。話し手は、自身の表現意図とそれぞれのテキストにとってふさわしい構文の選択に折り合いをつけながら、文章を構成していると考えられる。こうした中で、視点内在的テキストでは有情者視点のラル構文が発達し、中立視点テキストでは主催構文が発達したと考えられる。

なお、状態受身は、先行する変化に対する意識が希薄な結果状態を表すタリとともに、状態性の高い環境（連体・準体・連用）で用いられることで、動作主である有情者を完全に背景化し、中立的に自動詞相当に述べることができたものと考えられる（志波 2018）。よってこの状態受身構文は、他の構文ほどにはテキスト環境に依存していないと考えられる。尊敬構文については、変体漢文の文体に多いという事実がこの構文の発生にどのように関わったのか、今後さらに検討する必要があると考えるが、吉田（2019）の仮説は興味深い。

6. まとめと課題

本研究は、古代語のラル文について、これを「構文」として捉えることで、用法の多義がラル構文のスキーマの具現化という形で、ネットワークとして理解されることを提唱した。また、自然発生的自動詞構文とのつながりについては、自然発生の意味を継承しつつ「動作主含意行為動詞」とともに用いる構文として拡張し、さらに有情者に視点を置くテキストの中で「有情者に対して」という意味と形式を備えた構文として確立したことを述べた。

今後は、上代の「ゆ／らゆ」との関係、及び自然発生的自動詞構文が実際のテキストの中でどのように用いられていたか（特に有情者視点との関係）を調査していきたい。また、話し手の表現意図とテキストの構造パターンとの関係についても、さらなる事例を考察し、明らかにしていきたいと考える。

【用例資料】日本語歴史コーパスより『源氏物語』『枕草子』『今昔物語集』『古今和歌集』『竹取物語』

【参考文献】 穂田定樹（2008）『古記録資料の敬語の研究』清文堂出版。／岡部嘉幸（2018）「「非情の受身」のバリエーション：近代以前の和文資料における」岡崎友子他（編）『バリエーションの中の日本語史』159-173、くろしお出版。／奥田靖雄（1980-1981）「言語の体系性」『教育国語』63, 64, 65, 66（奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』むぎ書房：189-226.に再録）。／尾上圭介（1999）「文法を考える 7 出来文(3)」『日本語学』18-1：86-93。／尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『月間言語』32-4：34-41。／川村 大（2012b）『ラル形述語文の研究』くろしお出版。／釘貫 亨（1991）「助動詞「る・らる」「す・さす」成立の歴史的条件について」『国語学』164: 15-28／桜井光昭（1966）『今昔物語集の語法の研究』明治書院。／志波彩子（2018）「ラル構文によるヴォイス体系：非情の受身の類型が限られていた理由をめぐって」岡崎友子他（編）『バリエーションの中の日本語史』175-195、くろしお出版。／田中牧郎（1998）「今昔物語集の情意述語文と文体」『国語学』194:1-14。／森野宗明（1971）「古代の敬語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』大修館書店。／吉田永弘（2013）「「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語の研究』9-4: 18-32。／吉田永弘（2019）『転換する日本語文法』和泉書院。／Croft, W. 2003. Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy. H. Cuyckens, T. Berg, R. Dirven & K. Panther (eds.) *Motivation in language: Studies in honor of Günter Radden*, 49-68. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. / Genette, G. 1972. *Figures III*. Paris: Editions du Seuil. (花輪光・和泉涼一（訳）（1985）『物語のディスクール：方法論の試み』水声社。